
ようこそ、マール

ぺぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よつこそ、マール

【Nコード】

N8145Z

【作者名】

ぺぺ

【あらすじ】

ドアを開けると異世界でした。とありがちなトリップを試してみました（したくてしたわけじゃない）。

異世界人はやはり美形だったが、日本人特有の幼く（若く）見られるツーのは私には効力はありませんでした（怒）。

しかも、異世界人の方が童顔ってどういうこと？普通逆ぢやねっ！？みたいな話。王道のようで、そうならないギャクで頑張る作者を応援して欲しい。

0 問題発生（前書き）

優しく見守ってくださいとうれしいです（T ^ T）

0 問題発生

はい、ここで問題です。
ここはどこでしょう？

- 1・自分の部屋
- 2・他人の部屋

ヒント！ドアは確かに自分のアパートのドアでした。

閉じたら、アパートの外の景色がよく見える渡り廊下ではなく、絨毯の敷き詰められている長い室内の廊下に変わっていたってどういうこと？

…取り敢えず、もう一度ドアを開けて中に入るが、なんだこの重厚感溢れる家具類は？

しかも、豪華な装飾の数々。

ここは何時代ですか？

と、そんなこんなでテンパってます。

1 私の老け顔は世界どころか異世界まで共通です

「そこで、何をしている」

突然誰かに話しかけられた。室内に誰かにいたようだ。

声がした方を見れば、銀髪の男がこちらを見ながら睨んでいる。

「い、異世界トリップ？」

現在の状況を把握するのにその言葉しか思い浮かばない。日本人特有の取り敢えず笑つとけを出しながら、ずれた眼鏡を持ち上げた。

「何い？」

地を這うような声で聞き返してくる男の顔は、人を殺せそうなほど凶悪だ。

せつかくの銀髪と猫のような碧と金のオッドアイが勿体無い。眼鏡を顔に押し当てながらよく観察してみる。

ああ、これが異世界マジック！？異世界人はやっぱり美形なんだねっ

「貴様…殺すぞ」

そんなドスの効いた声をださなくても…。

見たところ三十代ですが、実際は幾つなんですかね？私は幾つに見えるかな？

ここは異世界マジックで童顔に見られたい！苦節26年…この日本

人にあるまじき老け顔でどれだけの辛酸を舐めてきたことか！！中学の頃には既に社会人だったよ

「私、幾つに見えますか！！」

ドッキドキのワクワクで答えを待つ。

十代に見られたらどうしよう！？きゃっ♪

「はあ？」

途端に呆れた顔になる彼。うむ、美形は何をしても美形なのはほんとうだったな！…鼻水垂らしても美形なのかもしれないけど、流石にそれは頂けないなあ。

「だから、私は幾つに見えますか？と聞いているんです」

その白けた顔はやめてください。微妙に傷つきますから。ついでに私にとっては死活問題なので早く答えて頂けるとありがたいんです・が！？

「…はあ、32」

……のおおおおおおっ！！

い、異世界マジックは私の顔には効かないのかっ！！

打ちひしがれて、思わず四つん這いになってしまっ。

何故だ…何故なんだっ！！

悔しさを拳に乗せて、これでもかと高級そうな絨毯を叩いてやる。

ぽすっ　ぽすっ

…なんて間抜けな音なんだっ！！これじゃ、私の憤りが表せないっ…。

不貞腐れて、ふかふかの絨毯に蹲る。

…なんだ、このふわふわめっ！気持ちいいじゃねーか…？

「…おい、貴様こちらの質問にも答えろ」

彼の声が近くでしたかと思うと、首筋にひやりとしたものがあたった。

…ああ、アレね。刃物ってヤツね。軽く薄皮きましたわっ！

あー、あー、殺すんですか？殺すんですよね？

だって、貴方偉そうだし？無駄に豪華な部屋にいらっしやるしいいんですよ別に、私なんか殺してくれちゃっても。

どうせ、異世界でも老け顔だったしね！！もう、いつか顔に年齢が追いつくなんて夢も見ませんから！

ただどね、これだけは言わせてもらいたいね。

「…美形なんて、滅んでしまえっ！！」

日本人の言霊の威力を思い知るがいいっ！！あーはっはっはっ！！！！！！

2 童顔なんて大嫌い

何、その哀れんでる目は。ム力つくんですけど。つか、じくじくと地味に刃物のあたってる部分が痛いんですが…。

「おま…」

「つか、取り敢えずこの刃物退けてくれませんか？地味に痛いんですけど」

彼の言葉を遮り、そう訴えてみる。刃物を睨みつつ、忌々しげに舌打ちするのを忘れない。

確かに私は貴方からすれば不審者&不法侵入者以外の何ものでもないだろうよ！この世界の常識なんて知らないし、実際死んでいてもおかしくないかもしれない。

しかしだ。こつちだって好き好んでこんなところにいるわけでもない。そこんとこ理解して欲しいけど、…無理だろうね！

「まあ、いいや。ところで、貴方は幾つなんですか？」

この先、生きていられるかもわからないし、今気になるのは異世界人の名前よりも見た目年齢が気になるところ。首に突きつけられている刃物を親指と人差し指で挟んで、首の方を避けさせる。だって、刃物はピクリとも動いてくれないからね。

「…42だ」

四十二…。42と言ったか、彼は？

ああ、身体が砂のようにさらさらと崩れていくのがわかるYO

こいつときたら、見た目三十代に反して自身は四十代ときたもんだ！
ははっ、異世界トリップって普通逆じゃねっ？あー、泣けるわコレ。

私のしたトリップに関していえば、見た目年齢は異世界マジックの
対象に入らなかったようだ。

ム力つくので、八つ当たりをしておこう。もちろん、犠牲者はお前
だ！その童顔！！

蹲り、刃物を掴んだ状態で睨み上げる。この際あまりカッコついて
ないのは置いておこう。

「お前なんか死んでしまえっ！！童顔なんて…だっいきっらいだあ
ああああっ！！！！」

この魂の叫びをきくがiiiiっ！！なんだその、心底バカにした顔は
っ！？

4 私の名前は発音が難しい？（前書き）

誤字訂正

4 私の名前は発音が難しい？

「…お前はアホなのか？それともバカなのか？」

一人ヒートアップしている私に、彼は至って冷静に聞いてくる。

おいおい、そんなに見つめるなよ！眼鏡がズレるじゃねーか？

美形に見つめられるなんてことは、生まれてこの方、女性しかない私。例えそれが憐れみの眼差しだったとしても…、恥ずかしいんだよ！このヤロー

ずれた眼鏡（叫んだときにずれただけ）を直しつつ、少しだけ冷静さを取り戻す。

「私は生粋の日本人ですが。というか、ここどこですか？」

迷子になったら、現在地の把握ぐらいはすべきでしょ？成人しちやったし、自分でできることはすべきかと。

「はあ…。お前はアホなうえにバカなんだな。ここは聖リディール帝国帝都サージルにある皇宮内皇帝専用執務室だ」

深いため息と暴言は聞かなかったことにしといてやろう。全然知らない国名だったけど、あんたは確かに偉かったとわかったしな！皇帝専用執務室に入れるのなんて皇帝か側近か、一部の使用人ぐらいなもんだろう。こんな態度のでかい奴が使用人な訳がない！

「…ちなみに、日本もしくは地球というところはご存知で？」

「知らんな」

もしかしたらと思い尋ねたことは、ばつさりと切って捨てられる。やっぱりねと思いいつつも、落胆してしまうのは仕方ないと思う。

「そうですか…。で、私不敬罪とかで死ぬんですかね？」

刃物を突きつけられているから、最悪の想定もしてみる。別に死にたくはないが、世の中には逆らい難しいものもあるし？人間諦めが肝心な気がする。

「…お前は死にたいのか？日本人」

片眉を器用に上げて奇妙に唇を歪ませる彼。て、いうか私の名前曰本人じゃないし。

「ああ、申し遅れましたが私花井まあると申します。そして、死にたくはないです。牢屋も嫌です。私は真っ当に生きて真っ当に死にたいんで」

自己紹介も兼ねて、訴えてみる。本当は三食昼寝付きの職場でも紹介して欲しいところだが我慢する。

「マーマール？変な名だな」

フンと鼻で笑い、私の名前をバカにする。

「…変なのはあんたの発音。ま・る・いが名字でま・あ・るが名前！」

バカにされた仕返しに懇切丁寧に教えてやると、彼の眼光が鋭くなる。

「お前、誰に口を利いている」

再び、あの地を這うような声がする。微妙に寒気を感じるが気にしないでおこう

「誰って、あんた。私あんたの名前知らないし。自分の名前は確かにおかしいかもしれないけど、初対面の奴にバカにされたくない」

彼は偉いんだろうし、もしかしたら皇帝陛下とかいうヤツかもしれないが、日本人の私には関係のないことだ。しかも、散々名前でかわれてきた私には名前をバカにされると我慢ができないのだ。

下から私が睨み上げ、彼が上から私を見下す。一時の間、沈黙が場を支配するがそれは彼の低い笑いで破られた。

「くくっ、お前は面白いな。まある？」

「違う、ま・あ・る！別に面白くともなんともないし」

笑いだしながら私の名を呼ぶが、微妙に違う。即座に訂正を入れてやり、思いつき顔を顰めてやる。

彼はうむと頷くと、また私の名を呼んだ。

「マール？」

「違う！！」

「マールー？」

「違う！！つか、伸ばすな」

「…マル」

「…もういい、なんとなく原因がわかったか。マールが一番近いからそれでいいよ」

どうして彼はうまく発音できないのか…。きっとこれも異世界マジックのひとつということだ。

私と彼は言葉が通じる。が、実際は違う言葉をしゃべっているという可能性でいくと、日本語の発音が外国で妙になるのと同じ原理なのではと思われる。自動的に翻訳されて聞こえるが、固有名詞についてはもしかしてしゃべっている言葉のまま聞こえるという感じじゃなからうか？

「何を疲れている？」

不思議そうに見下ろしてくる彼に、あんたにだよっ！という元気もなくしたを向いてため息を吐く。

「なんでもない。敢えて言うなれば、カルチャーショック？…なんか違うか？？」

今の気持ちを伝えようとしたものの、軽く挫折する。

仕方ないじゃないか！異世界なんて初めてだし、どう言えばいいのか全くわからないんだから…。

だから、可哀想な目で見るな！

5 ご飯をください。そして、寝床もください。

そつえば、晩御飯がまだだった。

仕事帰りで自宅のドアを開けたらここで、飯を食う暇もなかったことを思い出す。

何気に異世界トリップを普通に受け止めてる自分って凄い！そして、腹減った…。

「お腹空いた。今何時？」

そんなことを聞けるのはもちろん彼しかいなくって。

「先ほど神殿の鐘はなっていたが？」

なんだかんだ言って律儀に答えてくれる彼は意外といいヤツなのかもしれない。

「…それじゃあ、現代日本人の私には通じませんから。晩飯の時間はまだですか？」

神殿の鐘なんかで、異世界人の私が時刻を把握できるかってんだ。

「夕餉はまだだが、お前は一緒に食う気なのか？」

図々しいと言わんばかりの声に少しムッとなってしまう。しかし、異世界でいつご飯にありつけるかわからない。ここは彼の言動に乗っておこう

「食わしてくれるですか!？」

目をキラキラさせて言っ てやれば、彼は目を見開いてから爆笑しました。

「ついでに、寝床も貸してください。牢屋以外で」

図々しいついでに、寝床も要求してみる。

明日からは二連休だったから寝る気も満々だったからなあ、私。ああ、あつたかいご飯とあつたかいお布団が欲しい。んで、夢才チパタンでお願いしたいわ。

なかなか笑いの収まらない彼だが、彼の肩が笑いで震えるたびに刃物が首筋に当たりそうになるのは勘弁してもらいたい。指で抑えるといつてもそんなに抑えの役割は果たしていなかったようだ。凹む。

そんな彼を無言で睨みつけてやれば、肩を震わせながら刃物を鞘にしまってくれた。それから、重そうなきの机の上にあるハンドベルらしくものを振った。

それにしても、きたない机だ。仕事中にしても書類の整理ぐらいしろよ…。

「はあ、久々にこんなに笑ったぞ。マール、本当にお前は何者なんだ？」

彼に話しかけられ、散らかっていた机から彼に視線を戻す。

「だから、日本人だって」

真顔で答えてやる。

「さっきも言ったが、日本人とやらはなんなのだ？」

目の端に涙が浮かぶくらい爆笑したらしい彼は目元を拭いながら問いかけてきた。

そんなに爆笑してんじゃねーよっ！！

「地球という星の小さな島国の日本という国に住んでいる種族ですよ」

わからないと思いつつも、説明してやる。私って、偉い

「地球…。日本…？知らない」

知ってたら逆にビックリだっつーの。

「この世界にはないと思いますから。つーことで、私迷子なんです」

そう言っただけを見上げていると、彼は笑っていた。

…なんで、そんなに黒い笑みのよ？

6 ある意味初夜です（前書き）

読んでくださる方、そしてユニークにいれてくださった方、最後にお気に入り登録をしてくださった方…マジで感謝です。

自分でも駄文だと思うのですが、それでも皆様に力をもらい…駄文のまま進めたいきます（、ー、）ゞ

ひゃっほう→

6 ある意味初夜です

おかげさまで大層美味しいご飯をいただくことができました

いつの間にか俵担ぎにされて連れていかれた食堂と思わしき場所には豪勢な食事が用意されていましたよ！

しかし、本当にいたんだね！無駄に長いテーブルを少人数（今回は彼と私）で食事をする奴って！！啞然としてしまったが、飯は美味かった？

そして、連れてこられた寝室と思しき場所ですが、ここもやっぱり無駄にベッドがデカかった。天蓋付きのうえに、緻密な彫り物と宝石どもがベッドを煌びやかなものにしています
寝るだけの家具にその装飾はいらないと思う。

ちなみに、使用人の姿を一度も見えておりません。…なんかヤバくね？と思うのは私だけだろうか？？

「つか、いつまでいんのあんた」

腹も満たされて、眠気が襲ってきてるんですが？何故に彼は部屋からいなくならないのでしょうか？

「ここは俺の部屋だ」

ニヤリと笑う彼。

…なるほど！だから、ベッドも無駄に豪華なわけね
って、感心してる場合か！

「…私は床で寝ると？」

半目で聞き返してやれば、

「一緒に寝れば問題なかつた？」

とのたまいやがつた。

なので、さつさとベッドに上がって端っこに寝転がってやる。こんな美形に女扱いされるなんてはなから思っていない。恥じらいなんてクソくらえだ。

まあ、でかいベッドだし？ 実際問題ないのかも…。

とはいっても、男性としかも美形と同衾…。何このおいしいシチュエーション。さすが異世界！ 彼氏いない歴〃年齢の私に神サマがこ褒美ですか！？

何も起こらないとわかっていつつも、初の男性と同衾！ しかも美形。この際中身がアレなのは愛嬌だと思っておくよ

眼鏡をベッドの上にある物置スペースに置き、しっかりと布団を肩まで被る。

「おやすみなさい」

背中を向けつつ、就寝の挨拶はしてやる。偉いぞ！ 私。
ギシリとベッドが軋む音がして、細かに震えるベッドのマット。

笑うなら、声出して笑えよ！ と思ったのが最後意識はなくなった。

ああ、なんだか背中があったかい。

あまりの気持ち良さに、ぐりぐりと背中を寄せて一番落ち着く場所を探す。

トクトクと聞こえる音が安心感を誘う。

撫でられる頭やお腹も気持ちがいい。

アレ？

…私、猫でしたっけ？

7 いろいろ眩しい朝（前書き）

A ちよこつと訂正いれてみた。気づかないとは思っけれど（；´・`）
A

7 いろいろ眩しい朝

何かが瞼を刺激する。

「うゝん…」

まだ眠たい…。今日は休みだったはず。

背中に当たる温もりと、身体を覆う布団が気持ちいい。だけど、微妙にお腹というか脇腹が苦しい。

脇腹をもぞもぞと弄れば、硬い物体が乗っかっている。それを跳ね除けようとするが、なかなか動いてくれない。

仕方がないので、そこから移動しようとしてみるが身体が動かない。

「…重いい…」

顔がしかめっ面になるが、瞼を開けるのはまだ嫌だ。もっと寝ていたい。ジタバタもがきながら情眠を貪る。

そうしていると

、眉間に何かが当たりそれがグリグリと動く。

うぜえ！！

首を捻って逃れようとするが、ソレは何故か眉間に当たり続けて動いている。

しかも背中も小刻みに震えているではないか。

もしかして、地震…？

そう思い、ようやく薄く瞼を開けることにする。薄く開いた瞼眩しい光が飛び込んでくる。

「まぶしっ…」

咄嗟に顔を背けると銀糸が光を反射してキラキラと光っていた。なんとなく、ソレに手を延ばし引っ張ってみる。

「痛いぞ、マール」

低くて気怠げな声が頭上から降ってくる。ゆっくりと声のした方を見上げれば、碧と金を見つけた。

…？

なんとなしにその碧と金を眺めていると、そこに自分の姿が映っていることに気がついた。

「…不細工」

寝過ぎたのか浮腫んだ自分の顔が自分を見つめ返していた。

「…お前は本当に失礼な奴だな」

呆れたような声がして、ぼーっとそれを聞いていたが、漸く何かがおかしいことに気がつく。碧と金の下に穴を見つけたのだ。そこから、微かに風が当たる。

「……」

「……」

「のあぁっ！！」

仰け反ったつもりが大して距離を取ることは出来なかった。

「何してんの！あんた！？」

覚醒した目に飛び込んできたのは、銀髪と碧と金のオッドアイの美形。

寝起きには眩しすぎる男が私を見ながら、ニヤニヤとしている。

「何って、ナニ」

肩を震わしながら、そう答える美形。殴ってもいいですか？

「あほかっ！」

吐き捨てるように言ってやる。彼ほどの美形が私で立つとは思えない。…まあ朝立してないと、男としてどうなのよ？とは思っけどね！まあ、私を見れば萎えるでしょうが…。なんか、凹むわ。

「くくっ、冗談はさておき、マール起きないのか？」

低く笑って、美形が起き上がった。被っていた布団が彼の肌を滑り、捲れていく。

それに呼応するかのように、自分の目が見開かれていくのがわかつ

た。

なんで、お前は裸なんだっ！！

咄嗟に捲れた布団を掴んで、放り投げる。そして、彼の下半身に視線を走らせる。

…よかった！下は穿いてる。

「お前は自分の心配はしないのか？」

呆れた声ができるが、無視してやる。ベッドの上に置いた眼鏡を探り、探り当てた眼鏡を探りかける。視線は、彼の裸から逸らしませんよ。モッタイナイカラネ

しかし見事な筋肉ですね！胸毛は生えていないのか…。ちょっと残念。

乳首はやっぱり小さですなあ。

まじまじと裸体を観察していると、目が暗闇に覆われた。

「お前は痴女か！？視姦するな！」

どうやら怒られたようだ。

もしかして、今で乳首立ったんか？立ってしまったのか！？

どうしよう、口が歪むのを止められないっ！

ゴッッ

鈍い音とともに頭ので天辺に衝撃が走る。ああ……目がチ力チ力するよっ

星が眩しいね……！！朝なのにいいいいっ！！！！！！

そんなことを思いながら、目の端に水が溜まるのを止められなかった。

8 状況を把握しましょう

ああ、頭が痛い。頭の天辺を摩りながら、周りを見渡す。

視界に飛び込んでくるものは見たこともない家具類と、知り合いに
はいない銀髪美形。

そうでした。私、昨日異世界トリップとやらをしていたんだった。
夢オチなんてことにはならなかった模様です。

「はあ……」

思わず、ため息が漏れてしまう。これからへの不安がドツと押し寄
せてくる。頭で理解していても、心が受け入れない。

昨日はやはり気が動転していたのだろう。刃物を押し当てられて平
気だったなんて……今思い出せばブルリと悪寒が走る。しかも、そん
な奴に飯をたかり、寢床をたかり……その上同衾するなんて……！！

私はアホか！アホなのか！？

悶々と不安に苛まれていると、声をかけられる。

「朝食はどうする？」

「あ、いただきます！」

咄嗟にそう返してしまう、……私のバカ！！

そもそも、彼の名前すら知らない。昨日は彼の身分なんてなんとも

思っていなかったけど、こういう場合は身分制度とか意外と厳しいんじゃないかということに思い当たる。最悪の想定しか思い浮かばないのだが、それよりも気になるのは…。

いつの間に着替えたんだあんた？

昨日はいろいろなことがいっぱいばいで服を観察する余裕はなかったが、改めて見てみると綺麗な金系の装飾がなされた詰襟のよな服を着ている。某男装騎士の時代ですか？と聞きたいところだが、昨日彼が言っていた国名（もう忘れた）はその時代にはなかったハズだと思い直す。

対する自分を見てみれば脱がされた形跡もなく、昨日仕事帰りに着ていた作業服のままだった。

え？自分コレで寝たの？

サーツと血の気が引いていく気がする。私の着ていた作業服は私の汗とあちこちの埃に塗れている。そんな服で、こんな豪華な天蓋付きベッドにねたのか！？自分！！

昨日の自分を罵ってやりたい！こんな金のかかってそんなシートとか弁償できないよ！？…異世界の金なんて持ってないし！！

内心一人焦っていると、彼がギリシとベッドに片足を上げてきた。焦っている割にはベッドに座ったままの私は、ベッドの上で首を竦めながら彼の様子を窺った。

「食わないのか？」

片足をベッドに上げた状態でベッドの端に座る彼が、首を傾げながら私に聞いてくる。

なんでひとつひとつの動作が、そんなに色っぽいんだ？あんたは…。

「…食べます」

目を伏せながらそう答える。くれるってモノは貰ったかないとね！そこら辺は遠慮しないが、頭の中はシーツの賠償金のことではないだ。

なんとか言い逃れが出来ないものかと考えるが、なかなか頭が回転しない。

…よし、朝食を食べてから考えよう！

9 私の今後

シーツの弁償を言い渡されることもなく、ついて来いと言われ彼の後ろをついて行く。

今更、名前を聞けない自分。なんと呼べばいいのやら……。話しかける勇気もなく、本当は人見知りの自分がおおいに顔を出している。時折彼が振り返り、私を見ているがそれを苦笑いのような笑いで返すだけ。

そんな私を不思議そうに見やる彼。

ここにきて漸く私は足元が崩れそうな不安に押し潰されそうになっていた。

まずは戻れるのかということ。物語にあるような召喚とは違うトリップ。なので、この世界に魔法やそれに近いがあり、尚且つ私の世界に転移できる方法があるかどうかを確かめなければならない。

次にこの身分制度。私の身分は現時点でどれだけ保障されるのかどうか。散々昨日、身分の高そうな彼に反抗的……というか死んでしまえと言ってしまった私は今後どうなるのか。日本では身分制度はないが、ここは異世界。日本の、私の常識はまず通じないと思っていたほうがいいだろう。

そして、戻れる戻れないにしろこれから生きていくための生活。罰を受けない前提で考えれば、言葉が通じるのでなんとかなるかもしれないが、文化や風習がわからない以上運が良くない限り何かしらの迫害は受けることを覚悟しておかなければならないだろう。最悪は牢屋行きや処刑なんてこともあり得る事実、自然と自分で自分を抱きしめてしまっていた。

「着いたぞ」

思考を遮る声がしたかと思うと、鼻に衝撃が走る。

「うぶっ！」

変な声が出て、何かにぶつかったことに気づく。衝撃で2・3歩下がりが、前を見れば美形が呆れた顔をして立っていた。

眼鏡が壊れるわっ！

鼻を摩りながら頭を下げる。前を見てなかった自分が悪かったしね。ついでにずれた眼鏡も直しておく。

「ごめんなさい……」

頭を上げて彼を見れば、扉を開けてその先の部屋へと促していた。

10 拷問ですか？それとも羞恥プレイですか？

「なんですか？コレは…」

私の目に映る部屋の中には壁に沿ってズラリと人が並んでいた。

「食堂だが？…ああ、昨夜とは違うところだからか？」

私が何に驚いているのかわからずに、見当違いな答えを導き出す彼。

「違うし！この人の人数だよっ！！」

注目は避けたいので小声で突っ込む私。

しかし隣に立つこの美形、背が高い…。何センチあるんだか。自分が165センチで、それより20センチは高いだろう。

「何を言っているんだ？この人数くらいは普通だろう？」

んなわけあるかと叫びたいのを我慢する。多分彼はコレが普通なんだと思い直したからだ。育つ環境が違えば、なかなかその違いを理解するのは難しい。

説明するのも面倒くさいので、下を向きため息をひとつ吐くに留めた。

彼の手が背中に回り、長いテーブルに沿って歩く。昨夜とは違う食堂らしいがその部屋との違いは私にはよくわからなかった。敢えて言うなら、使用人と思しき人がいるかないか違いしかわからない。昨夜は全然、彼以外の人と会わなかったのに…今いるこの人数は何ですか？

丈の長いスカートを穿いてエプロンをつけている女性が大半で、五人ほど男性が混じっている。女性たちのスカートは淡いピンクと紺色、そして黒色と別れている。男性の格好は黒色の燕尾服を着込んだ人が一人と白シャツに紺色のベストとズボンを着た人が三人。最後に白いコックのような格好をした人が一人いた。

皆、視線は下を向いているのに、確実にこちらを観察している気配がする。

全く勘弁して欲しい。元の世界でもテーブルマナー自信ないのに、異世界のテーブルマナーなんて知るかってんだ!!

昨夜は彼しかいなかったし、ものすごくお腹が空いていたからマナーのマの字も思い出さなかったが、

流石に今は気になるっのっ!

これは嫌がらせなのかと、隣を歩いている彼を下から恨めしげに睨んでやる。

「ここに座れ」

彼はそんな私に構うことなく、立ち止まり着席を促す。

その席を見ると、既に皿などが並べてあり、その先には焼きたてと思わしきパンが籐籠のような入れ物に入っていた。

指定された席に座ろうとすれば、彼が椅子を引いてくれる。…おかしい。昨日はそんなことをしなかったのに!

若干引き気味に彼を見やれば、黒い笑み。…明らかに何かを企んでいる顔だ。

「どうぞ？」

手まで差し出して、座るよう促す彼。

ちよつと、キモイんですが…。

それを見なかったことにして座ろうとすれば、タイミングを合わせて椅子を押してくれた。

「どうも…」

ぼそりと礼を言い俯いておく。

それから、彼が長テーブルの一番奥、私の斜め前に座る気配がした。

こんなことになるなら、朝食は断わっておくんだつたと冷や汗をかきながら思ってみるが後の祭りだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8145z/>

ようこそ、マール

2012年1月9日01時51分発行